

Kenkyusha's Dictionary
of Theoretical Linguistics
Enlarged Edition

増補版

チヨムスキー 理論辞典

原口庄輔・中村 捷・金子義明 編

研究社

増補版はしがき

本辞典は原口庄輔・中村捷編『チョムスキー理論辞典』（1992年）の増補版である。増補部分は「極小主義プログラム」を中心に項目が選定してある。

生成文法は、初期から70年代までのいわゆる「(拡大)標準理論」から、80年代の「GB理論」を経て、90年代から現在にかけて「極小主義プログラム」の時代に入っている。(拡大)標準理論では個別言語の研究に焦点が当てられ、普遍文法について本格的な研究を展開する段階には達していなかったが、GB理論では普遍文法の視点から個別文法を見るという、いわば、視点が180度回転するような展開が見られた。さらに、90年代になって極小主義プログラムが提示されるが、このプログラムでは、生成文法の研究対象である言語機能(普遍文法)は完璧なシステムであるという命題が提示され、さらに自然界一般に働く原理、つまり言語設計における第三要因、が重要な働きをするという、従来とは大きく異なる命題のもとに研究が展開し、理論としての深さと精緻さをますます深め、これまでと異なる意味で興味をそそる理論となっている。

このような生成文法の理論展開を見ると、安井稔編『新言語学辞典』（1971年、1975年改訂増補）は「(拡大)標準理論」についての辞典であり、原口庄輔・中村捷編『チョムスキー理論辞典』（1992年）は「GB理論」についての辞典であると言ってよい。これに対して、本辞典の増補部分は「極小主義プログラム」についての辞典である。『(改訂増補版)新言語学辞典』と『(増補版)チョムスキー理論辞典』によって、これまでの生成文法の展開に関わる重要事項のすべてを調べることが可能となったわけである。

本辞典の旧版は1992年に原口庄輔・中村捷を編者として研究社から出版され、好評をもって迎えられた。本邦の生成文法研究者に

よって活用されたばかりでなく、1998年には韓国語訳が出版され、また中国や台湾でも活用されるなど、生成文法理論研究の手助けとして理論の発展に貢献してきた。しかし極小主義プログラムの展開に伴い、新しい辞典の必要性が生成文法の研究者や学生から寄せられることとなり、その要望に応えるために、極小主義プログラムの展開を中心に増補版を作成したのが本辞典である。

旧版の編者の一人であった碩学原口庄輔氏が誠に残念なことに2012年に急逝された。我々にとっては惜しんでも余りある大きな損失であった。今回の増補版の作成に当たっては、編集の力を強固なものとするために、金子義明が編者として加わった。本辞典の項目選定は、金子義明を中心に島越郎氏の助力を得ながら行い、それをもとに中村と金子が協議して最終的に項目を選定した。原稿の作成は、次に記す若き研究者諸氏の努力と好意によるものである。参考文献作成には遊佐典昭氏、島越郎氏、中島崇法氏、佐藤亮輔氏の助力を得ている。索引作成には中島崇法氏、佐藤亮輔氏の助力を得ている。校正の段階では島越郎氏、中島崇法氏、佐藤亮輔氏の助力を得ている。研究社編集部の津田正氏には、増補版の可能性について打診をいただき、その後原稿作成までの段階で大変お世話になった。入稿以降は杉本義則氏にさまざまな段階でひとかたならぬお世話になった。記してお礼申し上げる。

最後に、本辞典は「辞典」ではあるが、「引く」ものではなくて、「読む」ものであると考えている。特に若い研究者には初めから終わりまで通読することを奨めたい。理解できない部分もあるかもしれないが、通読することによって、その理論の輪郭がかなりはっきりとしてきて、知識も増加し、研究文献を読むときや論文を書くときに非常に役立つことは経験から明らかである。本辞典の刊行によって、生成文法研究がより近づきやすいものと感じられ、その学問的魅力が多くの人々によって理解されることを願っている。

2016年9月

中 村 捷
金 子 義 明

執 筆 者

秋		孝	道	荒	野	章	彦
朝	賀	俊	彦	土	橋	善	仁
後	藤	善	久	石	居	康	男
金	子	義	明	菅	野		悟
川	平	芳	夫	北	田	伸	一
コ	ル	ネ	リ	・	ダ	ニ	エ
三	好	暢	博	中	村		捷
中	村	太	一	中	島	崇	法
小	川	芳	樹	中	藤	元	樹
佐	藤	亮	輔	佐	島	越	郎
菅	原	美	佳	相	本	顕	士
高	橋	大	厚	富	澤	直	人
戸	塚		将	戸	澤	隆	広
内	田		恵	遊	佐	典	昭

(ABC 順)

は し が き

本辞典は、安井稔編『新言語学辞典』(1971)、『新言語学辞典(改訂増補版)』(1975)の姉妹編とも言うべきものである。最近のパソコンの性能と同様、本辞典は小型ながら、その性能、つまり情報量は、大型の辞典よりも優れている面が多い。小さいことは、大きいことであるということを実感したものと言ってもよいであろう。

英語学・言語学、チョムスキー理論に関する辞典は、1971年に出版された上記の辞典以来、研究社の『新英語学辞典』など、大辞典がいくつか刊行されてきた。しかし、大辞典は、小回りがきかず、原稿の作成や編集及び校正に時間がかかるため、刊行に長時間を要し、出版されたときには、既に新しい概念のホットな解説は得られないという、いわば「宿命」的弱点を背負っている。これに対して、本辞典のような小型の辞典は、そのような弱点を克服するのが比較的でき易いという利点をもっている。

1971年以来20年余り経った現在、最新の言語学の文献でみられる専門用語の手軽で分かり易い辞典がなく、授業などの際に学生に予習・復習としてチョムスキー理論関係の専門用語を調べさせるのに不便を感じていた。そのような悩みを解決すべく、我々が自ら編者として、そのような手軽でかつ新しい項目を引くことのできる辞典を編むことになった。今からおよそ3年くらい前のことである。

ここ10年くらいの間に、チョムスキーを中心とする言語理論の研究は、徐々に深みを増し、更に多様性を帯びてきているが、本辞典をひもとくといたる所にその様子がかいま見ることができると思う。数多くの著書や論文などで提案されている原理や概念は、多種多様であり、本辞典をそれらについて概略的な知識を得るための手ごろなレファレンス・ブックとして活用するならば、言語学や言語理論の理解を更に深める上で、役立つことになろう。

本辞典の説明は、可能な限り平易かつ明解を目指し、同時に内容を充実させることを心がけた。したがって、本辞典は大学1年生もしくは3年生レベルの英語学の概論などで、生成文法に関する概観を得る上で利用できることはもちろん、大学院以上のレベルでも、最近の研究状況を把握するためにも利用価値があるように工夫がなされている。ただし、本辞典では、音韻論関係の用語は、除いてある。全体のスペースの配分上の要請とほかの計画との重複を避けるためである。

本辞典は、比較的短期間の間に、多くの若い力を結集し、その献身的努力によって完成されたものである。日本はもとより、世界の多くの国で若い人に利用されて、チョムスキー理論の新しい姿のよりよき理解を得る上で役立てられれば、望外の喜びである。

本辞典は、時代の波を反映して、コンピュータ製版を用いている。オリジナル原稿はすべてフロッピー・ディスクに入っているので、読者の希望が多ければ、ゆくゆくはCD-ROM版でも手に入れることができるようにしたいと願っている。原稿をフロッピー化する際には、多くの筆者からフロッピーを提出してもらった。手書きの原稿の入力とフロッピー原稿の整理等に関しては、塚越多恵子さんの手を煩わせた。

原稿の作成は、次に記す若き友人諸氏の努力と好意によるものである。項目選定の段階では、金子義明、菊地朗氏を中心に原田かづ子、佐藤ちゑ子氏からの援助を受けている。参考書目は、富澤直人、中村良夫氏により整えられた。また、索引は金子義明、菊地朗氏により整えられたものである。原稿の整理と校閲には、我々編者が2人でこれに当たり、再校の段階で、熊谷健、小川芳樹、島越郎、西山國雄、畠山雄二、福田有美、本間伸輔、田中伸一、吉田和史の諸氏の助力を得ている。研究社の奥和郎氏には、すべての段階でひとかたならぬお世話になった。記してお礼を申し上げる。

1992年2月29日

原 口 庄 輔
中 村 捷

執 筆 者

阿秋	部	潤	溝	越	彰
青	島	道	中	村	捷
朝	賀	孝	中	村	夫
千	葉	幸	岡	崎	房
遠	藤	俊	岡	野	男
福	安	そ	奥	場	徳
原	口	の	大	石	史
橋	本	喜	大	西	強
橋	本	勝	大	田	斗
本	本	庄	太	藤	聡
本	間	二	齐	藤	治
本	間	美	佐	藤	子
稻	垣	伸	佐	山	志
岩	澤	大	関	木	樹
加	賀	勝	杉	橋	融
金	子	信	鈴	野	亨
加	藤	義	高	田	厚
川	平	雅	高	澤	二
菊	地	芳	登	田	彦
丸	田	忠	富	田	人
松	沢	三	内	山	恵
		枝	山		誠

(ABC 順)

目 次

増補版はしがき	iii
(旧版)はしがき	vi
本辞典の使い方	x
チョムスキー理論辞典	
Part 1 (旧版部)	1
Part 2 (増補部)	529
(旧版)参考文献	697
増補部参考文献	747
索 引	779

本辞典の使い方

本辞典は旧版部（1992年）Part I と増補部 Part II からなる。

1. 索引

- (1) 本辞典では旧版部の索引と増補部の索引を一つに統一してある。
- (2) 索引には本文の見出し項目に加えて、見出し項目になっていないものも含まれる。例えば、phase head は見出し項目ではないが、phase の項で見られるほかに数か所で言及されていて、それらは索引項目としてあげてある。また、quantifier raising (QR) は旧版部と増補部の両方で見出し項目となっているが、それぞれの該当箇所が示してある。

2. 参考文献

- (1) 本辞典には旧版部と増補部のそれぞれに対応する「参考文献」がある。
- (2) 増補部の参考文献には旧版部の参考文献と重複するものも含まれている。その中には再録や翻訳等々について旧版出版時以降の情報が加えられているものもある。
- (3) 参考文献では学術誌名を略記している場合がある。学術誌の略記方法は旧版部の「参考文献」冒頭にリストとしてあげてある。
- (4) 本文中において引用文献を示す場合、原則として、「著者名(出版年)」の形式を用いてある。例えば、増補部の Chomsky (1995a) は、増補部参考文献の Chomsky, N. (1995a) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press のことである。同一著者の同一年における複数文献は、1995a, 1995b, 1995c, ... のようにして区別している。
- (5) 著者が3名以上の場合は、本文中では Berwick et al. (2013) のように筆頭の著者名だけをあげ、参考文献ではすべての著者名

をあげている。

3. 相互参照

- (1) 本文中の相互参照 (cross reference) は、矢印 (→) によって示してある。
- (2) 旧版部の相互参照は旧版部の項目をさしている。増補部の相互参照は特に指示がなければ増補部の項目をさすが、どちらの項目か明示する必要のある場合は旧版部を「Part I」、増補部を「Part II」として区別している。

4. 略号・符号

- (1) 略語や符号は、その都度説明してあることもあり、自明のものとして説明を省いていることもある。例えば INFL は I と、COMP は C と略記することが多い。A の位置の A は項 (argument) を意味し、A' の位置の A' (A-bar) は非項 (non-argument) を意味する。pro, PRO, Agr のように見出し項目として解説されているものもある。
- (2) X バー (X-bar) 理論のバー表記は、すべて X', X'' で代用してある。非項の A バーも A' で代用してある。

Part II

(増補部)

A

Active vs. inactive (活性的・不活性的) Chomsky (1999=2001) の用語。探査子 (probe) あるいは目標 (goal) α が、解釈不可能 (uninterpretable) 素性を含むなら α は活性であり、含まないなら α は不活性である。一致操作 Agree が適用されるには、探査子と目標が共に活性状態でなければならない (Chomsky (1999: 4))。

例えば、(1a) の構造において定形節の T は解釈不可能素性である ϕ 素性と EPP 素性を有しており、名詞 man は解釈可能素性である ϕ 素性と解釈不可能素性である格素性を有している。このとき、T の ϕ 素性が探査子となり、これと適合 (match) する素性を探査し、その結果、目標として man を探知する。そこで両者の間に一致操作が適用して T の ϕ 素性と man の格素性が削除される。(T が主格素性を有しており、それとの照合により man の格素性が削除されるとする考え方もある。) なお、man の ϕ 素性は解釈可能素性であるため削除されない。次に T の EPP 素性が削除されなければならないが、EPP 素性は指定部に DP が生起することにより削除される。そこで、(1c) のように目標の the man が TP 指定部の位置に併合されて T の EPP 素性が削除される。このようにして解釈不可能素性がすべて削除される。

(1) The man visited the city.

a. T [ϕ , EPP] [_{eP} the man [ϕ , Case] [_{VP} visited the city]]

b. T [ϕ , EPP] [_{eP} the man [ϕ , Case] [_{VP} visited the city]] (一致)

c. [_{TP} the man [ϕ , Case] T [ϕ , EPP] [_{eP} t_{the man} [_{VP} visited the city]]] (併合)

一致操作によって目標の格素性が削除されると、その目標は活性状態ではなくなり、別の探査子の解釈不可能素性を削除することはできない。(→ Agree, defective intervention constraint, prove-goal)

Adjunction (付加: 極小主義プログラム以前のこの概念については Part I の同項目を参照) 極小主義プログラムでは、付加構造は併合 (Merge) 操作の一つである対併合 (pair-Merge) によって作り出される。通例の併合は集合併合 (set-Merge) と呼ばれ、二つの項 (term) を対象としてその間に順序づけをしない無順序集合 (unordered set) を作り出す操作である。例えば、 α と β が併合されると α と β からなる集合が形成され、これを $\{\alpha, \beta\}$ と表記する。これに対して、付加構造を作り出す対併合は順序づけを与える特性を持つ。そのため、対併合によって形成された統語対象 (syntactic object) は、

集合論の表記にならい、対 $\langle a, \beta \rangle$ として表記される。この対は二項順序集合であるので、第一項であるか第二項であるかが意味を持ち、 $\langle a, \beta \rangle$ と $\langle \beta, a \rangle$ は異なる統語対象を表す。

対併合の二つの項の順序づけは「 a が β に付加する」という付加構造の非対称性 (asymmetry) に対応し、形成された統語対象 K が持つ素性情報 (形式素性、意味素性) は常に β (すなわち付加のホスト) の標示 (label) により決定されると規定される。 β の標示を γ とすると、対併合により形成される付加構造 $\langle a, \beta \rangle$ は、厳密には、(1a) のように表記される (Chomsky (2000))。 (なお、Chomsky (1995a, b, c) は (1b) のように表記した。)

- (1) a. $K = \{\gamma, \langle a, \beta \rangle\}$
 b. $K = \{\langle \gamma, \gamma \rangle, \{a, \beta\}\}$

例えば、(2a) の K は、関係節 a が [_{NP} picture of Bill] (= β) に付加することにより形成され、概略、(2b) の構造を持つ。

- (2) a. Which [_K [_{β} picture of Bill] [_{a} that John liked]] did he buy _{t_{wh}}
 b. $K = \{N, \langle \text{that John liked}, \text{picture}_N \text{ of Bill} \rangle\}$

Chomsky (2004a) は、 β に a が付加したときに、付加によって β が持っていた特性に変化がもたらされないことが、付加 (対併合) の中心特性であると規定すると同時に、付加した要素 a については、 $\langle a, \beta \rangle$ の外部にある統語要素との間で (c 統御のような) 関係を持つことを新たに認める経験的必要性が見いだされないことから、付加要素 a と外部要素との関係が構築されることはないと仮定する。つまり、計算部門において、 $\langle a, \beta \rangle$ はその外部要素との関係において、あたかも β そのもののように振る舞い、また、付加要素 a はあたかも別次元に存在して外部要素からは見えない要素である。

その上で、付加詞が示す特性を、遅い併合 (late Merge) のような非循環的操作 (Lebeaux (1991) や Riemsdijk and Williams (1981) 参照) を仮定することなく、意味解釈及び線形化にあたって、対併合の構造を集合併合の構造に変換する操作 (SIMPL) を設け、SIMPL と移動操作の適用順序の違いから説明することを試みている。例えば、(2a) は概略次のように派生する。

- (3) a. [_{NP} picture of Bill]
 b. [_K [_{NP} picture of Bill] [that John liked]]
 c. [_{DP} which picture of Bill [that John liked]]
 d. [_{VP} buy [which picture of Bill [that John liked]]]
 e. [_{CP} he *v* buy [which picture of Bill [that John liked]]]
 f. [_{CP} [which picture of Bill [that John liked]] [_{CP} he *v* buy {which picture of Bill [that John liked]}]]
 g. [C T [_{CP} [which picture of Bill [that John liked]] [_{CP} he *v* buy

の時, uF, iF をそれぞれ探査子 (probe), 目標 (goal) と呼ぶ. 一致操作の結果, uF は iF から値を付与された後に削除される.

この一致を用いた分析では, 英語の主語・動詞一致は次のように説明される (取消線は素性が削除されたことを表す).

(2) John loves her.

(3) $[_{TP} T_{[u\phi: _]} [_{e^*P} \text{John}_{[i\phi: 3sg], [uCase: _]} v^* [_{VP} \text{loves her}]]]$

↓ 一致

$[_{TP} T_{[u\phi: 3sg]} [_{e^*P} \text{John}_{[i\phi: 3sg], [uCase: Nom]} v^* [_{VP} \text{loves her}]]]$

述語内主語仮説 (predicate internal subject hypothesis) のもとでは, 主語は v^*P 内に基底生成される. 定形の T は解釈不可能な ϕ 素性を, 主語名詞句は解釈可能な ϕ 素性と解釈不可能な格素性を持つ. また T は主語名詞句を構成素統御している. したがって, (3) では (1) に示す一致操作の構造条件が満たされている. ϕ 素性の一致の結果, T の ϕ 素性は John の持つ 3sg の値を付与される. さらに, 定形の T と一致関係に入った名詞句の格素性は主格 (Nom) の値を付与される. 同様に, v^* と一致関係に入った目的語の名詞句はその格素性に対格 (Acc) の値を付与される.

(4) $[_{e^*P} v^*_{[u\phi: _]} [_{VP} \text{loves her}_{[i\phi: 3sg], [uCase: _]}]]]$

↓ 一致

$[_{e^*P} v^*_{[u\phi: 3sg]} [_{VP} \text{loves her}_{[i\phi: 3sg], [uCase: Acc]}]]]$

この分析のもとでは, 名詞句の格素性は名詞句を移動することなく認可される. この点において, 初期の極小主義プログラムで仮定されていた照合理論 (checking theory) と大きく異なる.

一致分析のもとでは, 主語名詞句の TP 指定部への移動は, T の持つ EPP 素性によって駆動される.

(5) $[_{TP} T_{[u\phi: _], [EPP]} [_{e^*P} \text{John}_{[i\phi: 3sg], [uCase: _]} v^* [_{VP} \dots]]]$

↓ 一致・移動

$[_{TP} \text{John}_{[i\phi: 3sg], [uCase: Nom]} T_{[u\phi: 3sg], [EPP]} [_{e^*P} \text{John } v^* [_{VP} \dots]]]$

また, EPP 素性は虚辞 there の指定部への併合によっても満たされる.

(6) There is a man in the room.

(7) $[_{TP} T_{[u\phi: _], [EPP]} [_{eP} \text{a man}_{[i\phi: 3sg], [uCase: _]} \text{in the room}]]]$

↓ 一致

$[_{TP} T_{[u\phi: 3sg], [EPP]} [_{eP} \text{a man}_{[i\phi: 3sg], [uCase: Nom]} \text{in the room}]]]$

↓ 併合

$[_{TP} \text{there } T_{[u\phi: 3sg], [EPP]} [_{eP} \text{a man}_{[i\phi: 3sg], [uCase: Nom]} \text{in the room}]]]$

一致操作に課せられる一般的制約に関しては, フェーズ不可侵条件 (phase-impenetrability condition), 活性的・不活性的 (active vs. inactive), 介在効

果 (intervention effects), 欠如要素介在制約 (defective intervention constraint) を参照。

この Chomsky の一致分析に関しては多くの問題が存在する。格素性の値付与に関しては Pesetsky and Torrego (2001, 2004) を, EPP 素性については Bošković (2007) 等を, 探査子・目標となりうる素性の種類に関しては Pesetsky and Torrego (2007) 等を, 一致操作が適用される構造条件に関しては Zeijlstra (2012), Preminger and Polinsky (2015) 等を, 単一の探査子が複数の目標と一致関係に入る可能性については Hiraiwa (2001, 2005) を参照。(→ agreement, probe-goal, valuation)

Agreement (一致) 一致 (agreement) とは, ある語・形態素の特性が関連する語句の特性に依存して決定される言語現象である。「一致」という用語は, Agree の訳語としても用いられるが, agreement は具体的言語現象を指すのに対し, Agree は素性間の関係を生み出す操作を意味する。

英語では, 主語の人称・数に応じて動詞の形態が変化し (John loves Mary vs. We love Mary), これは主語・動詞間の一致現象を示している。英語の主語・動詞一致の例では, 形態に影響を与える要素と影響を受ける要素の関係が一对一であるが, 一对多となる場合も存在し, このような例を特に多重一致 (multiple agreement) と呼ぶ。例えば, スワヒリ語の複合時制構文では, 時制形態素に加えて相を表す助動詞も主語名詞句と一致する (Carstens (2001: 150)).

- (1) Juma a-li-kuwa a-me-pika chakula.
 Juma 3SG-PST-be 3SG-PERF-cook 7food
 'Juma had cooked food.'

どのような素性が一致に影響を及ぼすのかに関しては, 言語間・構文間で大きな差異が見られる。英語の主語・動詞一致では, 人称・数が一致を示すが, アイスランド語の受動分詞は名詞句の性・数・格と一致を示す。また, 一致が観察される環境についても大きな差異が存在する。英語では, 名詞句とそれを修飾する形容詞の間の一致は観察されないが, バスク語ではこの種の一致が見られる。一方, 日本語・中国語のように一致がまったく観察されない言語も存在する。(→ Agree)

Agreement phrase (AgrP) (一致句) 初期の極小主義プログラムでは, 屈折要素 INFL が持つ時制 (tense)・一致 (agreement) の素性は, それぞれが独立した主要部に担われると考えられている (→ split Infl)。このうち, 一致素性を担う主要部が Agr(eement) であり, その最大投射範疇 (maximal projection) が AgrP である。なお, 時制を担う主要部としては T(ense) が仮定されている。Agr は, 初期の照合理論 (checking theory) に